【郷土史への扉】

天の逆鉾由来考 ～後編～

前回に引き続き、高千穂峰に立つ天の逆鉾についてお話します。今回は、天の逆鉾は元々どんな形をしていたのかということについて考えてみました。

まずは考古資料に手掛かりを求めてみたところ、弥生時代の鉾がいくつかありました。今の逆鉾と考古資料と比べてみて、やはり問題になるのは、形が違いすぎるという点です。

弥生時代の鉾

それならばと、過去、逆鉾の姿を記述したり、絵図に描いたりした人はいないか、さらに資料を探してみました。

江戸時代に高千穂に登り、天の逆鉾を見た主な人を年代順に並べてみると次のようになります。

橘南谿　天明二年（一七八二）
白尾国柱　寛政二年（一七九〇）
高山彦九郎　寛政四年（一七九二）
木下逸雲　文政十一年（一八二八）
伊東凌舎　天保七年（一八三六）
坂本龍馬　慶応二年（一八六六）

薩摩藩の国学者、白尾国柱は、『麑藩名勝考』の中で次のように述べています。「長サ八尺ばかり。今、その鉾は折れて幹のみ立てり。その長サ六尺、圍一尺ばかり」「その鉾は文禄元年、山上炎たりし時、焼け折れしを移し奉れりとそ。今、山の東南三里ばかりの山足に安置して荒嶽権現と斎い祀る。即ち神体なり。その鉾の長さ一尺余」

白尾氏の記事から、逆鉾が四百二十年ほど前に折れたこと、折れた先の方は荒嶽権現の御神体として祭ったことは分かりました。もしその折れた先の部分が残っていたら逆鉾の全体像を復元できる一番確実な物件になるのですが、残念ながら現在では、御神体は所在不明とか。そうなると、今残る逆鉾から元の姿を追っていくよりほかに方法はありません。

逆鉾の破損状況を調べていたところ、木下逸雲という長崎の画家が描いた折れた逆鉾の絵図を目にすることができました。

逆鉾の最上部の受皿のような部分に「此三処三股の鉾先の折跡ならん欤」と注記がなされ、さらに皿を真上から見た図（中心に丸い円、その前後にや

や小さい楕円がある）にも、同じような注記があります。

問題は、この「折れ跡」なのです。（これが今のように逆鉾に三本の剣を付けた根拠になったものか？）

この折れ跡に注目して、天の逆鉾の形を考証した学者がほかにもいます。それは伴信友という江戸時代後期の国学者です。『比古婆衣』という本に、「霧島山逆矛考」という文章を書いていることを、最近知りました。

伴氏は仏教書の理論を根拠に、天の逆鉾は、密教のご祈祷に使われる法具の一つ、金剛杵（鈷杵）をかたどった物であると考証しています。

仏教書には、インドの人たちが考えた宇宙の創造主「大梵天王」を、日本の創造神「天神（イザナギ・イザナミ）」になぞらえ、両者を結びつけた神仏混交（神と仏が同体）の理論が基本にあるようです。

大梵天王あるいは大日如来をシンボル化したのが金剛杵で、日本の天神を象徴させたのが天の逆鉾というわけです。ただし、ニニギノ命が高千穂に天降ったときに持ってきた鉾と違うことになりますが…。

伴氏は「ほこの折れ、あと三つある」と書き、真ん中に剣、右左に両刃と片刃の剣が立った姿を推定しています。ただこの想定図は、鈷杵の上下一対という形態原則からみて、天の逆鉾には当てはまりません。

とにかく天の逆鉾を神仏両面から考察したのはすごい着眼です。

日本には高山を神や仏の住む場所（霊山）としてあがめてきた山岳信仰があります。神仏混交が盛んになる平安時代以降、高千穂の峰に仏像や天の逆鉾のような御神体が作られたとしてもおかしくありません。

国学者である伴氏は、仏教徒が天の逆鉾の製作にかかわったと憤り、「行基・伝教（天台宗の祖、最澄）・空海等の一派が作り上げた仏教理論に当てはめようとして、天孫降臨の古い遺跡に鉾（鈷杵）を作って、ひそかに建てて置いたものだ」と言い切っています。

残念ながらこの由来考では、作られた当初の逆鉾の姿を得ることはできませんでした。天下に名高い神代の珍宝、「天の逆鉾」は龍馬時代の姿のままで置けば良いということかも知れません。

文責＝藤

※内容に関する問い合わせは、隼人塚史跡館☎(43)7110までお願いします。